

歴史は未来からスタートする

— 複雑系の理論<sup>(1)</sup>から見た歴史の見方と解き方 —

二宮 哲雄

序論

有らゆる生物の中で、「己に問う」ことが出来るのは人間だけである。四百万年前、あるいは六百万年前だったかも知れないが、人類はこの地上に姿を現わして以来この営みを続けてきた。そして「人間とは何ぞや」というその問いを正確に、そして深く行うために哲学や宗教を創ったが、近代に入ってその手段として科学を創った。とりわけ二十世紀にはその科学を存分に使う人間は自らを明らかにして来たのであった。二十一世紀になって、その人間についての問いと手続きは、ますます進化し、深化している。

改めて言うまでもなく、「人間の本质」とは何か、とか他の動物などと違う「人間らしさ」とはどういう点にあるのかといったことを明らかにするのは、科学（学問）の究極の目標であると言わねばならない。ところでこれまでに、この点に関してどのような発見がなされたであろうか。

二十世紀が終わるまで、後十年となった頃、私は、人間は人間の本质についてのどのような発見を行ってきたであろうか、ということを整理してみた<sup>(2)</sup>。それは次のようである。即ち人間の人間らしさ

の根源的諸要素（細胞）は次のようになる。それらの機能的な諸特徴という面から整理してある。

「人間らしさ（人間の本质）」の根源的諸要素〈細胞〉（*humansus germen cella*）」

- (1) 言葉を使う。そして文化を創る。（*lingua, cultura function*）
  - (2) 道具を使って、手で働く。（*instrumentum manuale function*）
  - (3) 歴史社会を創る。（*societas historica function*）
  - (4) 超越的存在（神や仏）を創り信じる。（*suprema existential function*）
- 以上である。

ここで本稿との関連で、(3)歴史社会を創る、に注目して頂きたい。そして併せて(1)言葉を使う。そして文化を創る、をも視野に入れて欲しい、と考える。

「歴史」は、そして当然「歴史研究」は、明らかに人間の本质に深く結びついているのである。

そのなかで本稿は、主として人間自らの過去の変遷、つまり現在までの来歴という問題について見ることになる。その来歴の内容はどのようなものであったのか。それからそのよう到来を振り返る場合の、スタートの時点（地点）はどこにあったのか。つまり過去か現在か。それとも未来なのか。とりわけそのような課題について明らかにしていくのが、本稿の目的である。

この課題を考察する方法として、私は、歴史学、歴史民俗学、歴史人類学、経済史学、経済学および社会学等の学問的方法論を、

総合的に使って解明した。その他使用した方法については、その必要性が生じた局面に至って、解説を施すことにする。

## 本論

一、歴史は過去からスタートする。

その成果は、おおよそ次のようである。

一、原始・古代—六世紀（六〇〇年）、あるいは十一世紀（一一〇〇年）まで。大和朝廷から奈良平安時代にかけての、原始・古代の社会は、部族、氏族、群れ（ムラ）あるいは原始共同体などと呼ばれる社会形態を持った社会であった。

その社会的個性は、「断片型」とも「孤立型」とも呼ぶことが出来る。

これを図式化すれば（図1）のようになろう。

当時の歴史観（時間の観念）は、「万物は流転す」、「流れる水は再び復らず」というものであった。

凡そ著作（本）、とりわけその「目次」は、それぞれの歴史社会の実態を反映しているものと言ふことが出来る。

（図1）

そこで、この時代に関連した著作を見るに、

○ 例えばプラトン (Platon) の『定義集』（中

○ 央公論社『世界の名著』あるいはアリスト

○ テレス (Aristoteles) の『対話編』（同上）

○ のごとく、「断片型」のものになるだろう。

二、中世—十一世紀後半から十三世紀初めに

かけて。十二—十三世紀（一一〇一年頃から一二〇一—一三〇一）まで。中世の社会は、莊園制と呼ばれる個性的な社会形態を持った社会である。

その社会的個性の中には、原始・古代と違った「総合性」、「統一性」の要素が出てくる。これを図式化した場合（図2）

（図2）

のようになり、原始・古代と形の上では、さほど変わってはいない。歴史観も同じようであるが、次に継ぐ目も見逃すわけには行かない。著作の目次も同じ様である。

三、近世—十六世紀末から十九世紀中葉にかけて（一六〇〇年から一九〇〇年ごろまで）。

（図3）

近世の社会は、封建国家とか封建体制と呼ばれる個性を持った社会形態を持った社会である。これを図式化すれば（図3）のごときピラミッド型のものになる。

歴史観や社会観の中に、近世中期から後期にかけてのものであるが、ア・分類の思想、イ・類型化の思想、ウ・直線的思考様式、エ・段階思想、オ・弁証法的思考様式

等が、立て続けに現われてくるのは、注目される。これらは二十世紀（一九〇〇年代）の中葉まで続いていくことに注意しなければならぬ。

これらを図式化すれば（図4—8）のようになる。

著作の目次は、テンニース (F.Tönnies) の『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(F.Tönnies, *Gemeinschaft und Gesellschaft; Begriffe der reinen Soziologie*, 1887) に見られるように、全体を二つの部分に分け、章と節を設けるが、前半の部分と後半の部分は意味的に対応している、という構成の仕方を取ったり、ヘーゲル (G.W.Hegel) やマルクス (K.H.Marx) の著作 (G.W.F.Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, 1807, K.H.Marx, *Das Kapital*, 3 Bde, 1867-94) のごとく形式上では、編や章の単純な羅列の形式を取っているが、内容の上では、弁証法論理に基づいた、複雑な、発展的な意味と構成を取っているものである。この時代の中で、テンニース様式のものより、ヘーゲル・マルクス様式のものが増えている。

二、歴史は過去・現在からスタートする。

その成果は、歴史が過去からスタートするという立場と、現在からスタートするという立場の、二つの事例の混じったかたちで現れる。

四、近代と現代—十九世紀後半から二十世紀末まで。(一八五〇年頃から二〇〇〇年頃まで)。

近・現代の社会は、近代社会、民主社会、平等社会と呼ばれ



(図4)

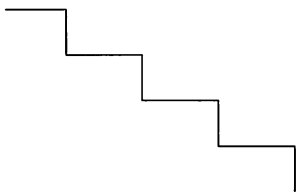


(図5)

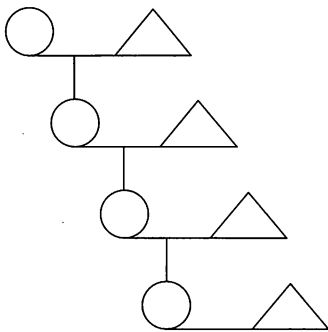


(図6)

(図7)

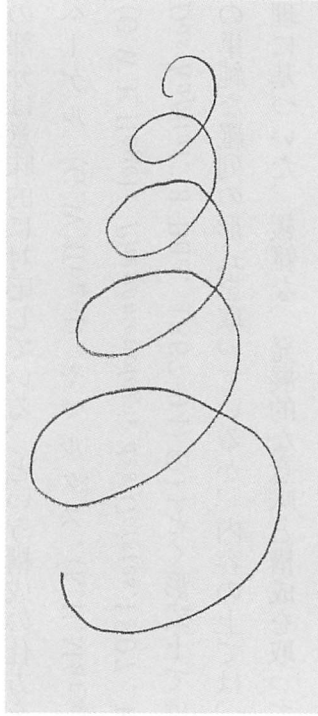


(図8)

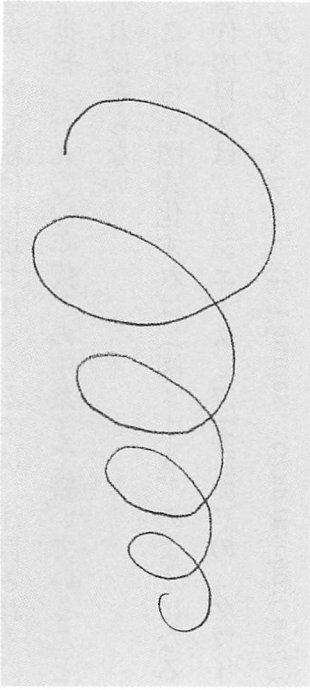


る個性という特徴を持つ社会形態を持つに至る。然しそれと共に、近代と前近代の対立、民主と独裁の相克、平等と不平等の対立が伴って起こり、思考形式の面ではリピーティング(repeating)」「繰り返し、反復)の理論や「ダイナミズム(dynamism) (力動、動態性)の思考形態が加わってくる。さらに二十世紀末から、「螺旋的思考様式(spiral thinking)や「二重(複製)螺旋構造の思考様式」(double spiral thinking)

(図9) 過去から現在へ



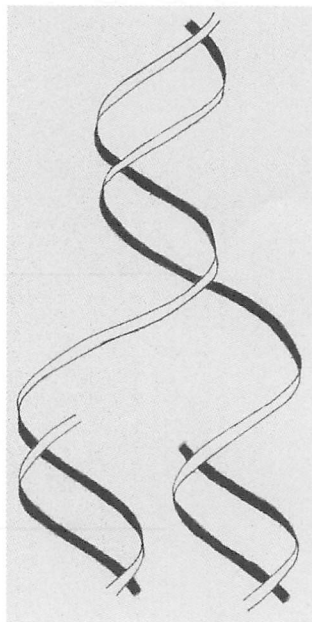
(図10) 現在から過去へ



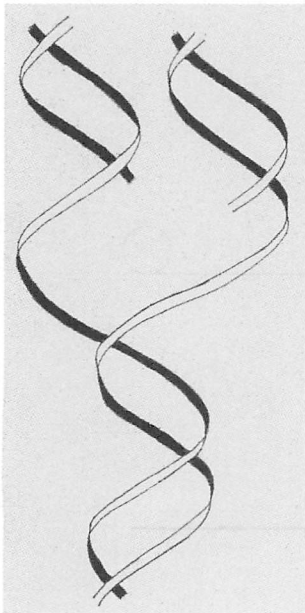
といった思考様式が強く全部門に出て来ることは注意すべきである。(『読売新聞』一九九九・七・一)

これらを図式すれば(図9-12)のようになる。(同右修正) ここでも始めは、歴史のスタートは過去にある、という考え方が強かったが二十世紀の末に近づくに連れてそのスタートが現在にある、という考え方が、現われるようになった。近代化の歴史の趨勢の中で、人間(個人)の主体性・自主性が次第に

(図11) 過去から現在へ



(図12) 現在から過去へ



強くなっていったこととも関係があるのであろう。

### 三、歴史は未来からスタートする。

二十一世紀は「複雑系 (Complexity)」の理論と思考形態といった社会原理によって統べられる世紀になるであろう。

〈特記〉この世紀について考察するに当たっては、特に「序論」において論じた(人間の本质)の根源的諸要素(細胞)について私が論述したところを読み返して欲しい。

### 五、二十一世紀—二〇〇一年から。

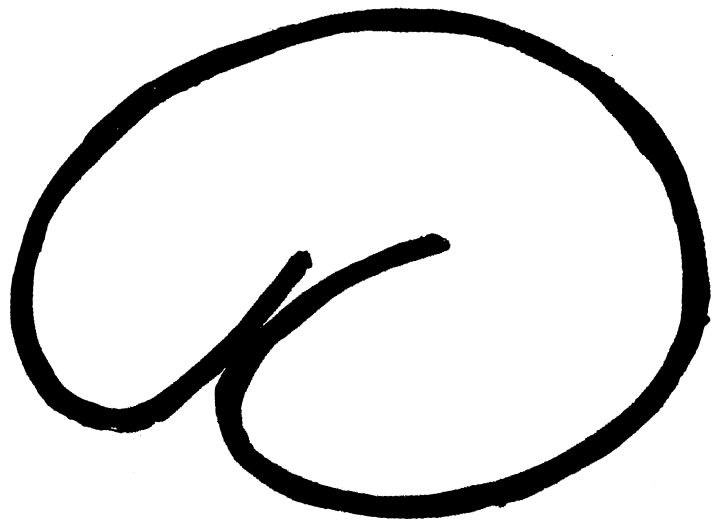
二十一世紀は多価値、多文化、他民族、多社会(複合社会、混住化)といった社会原理に基づく諸現象が複雑にからみ合い一種のカオス(Chaos)(混沌)の性格と状態を基本的に持つ。そして自己組織化(self-organization)を進めながら発展していく社会を生む世紀となるであろう。

これを図式化すれば、(図13)のように表わすのが最も適切であろう。

いうまでもなく、この図は「人間の脳」の図式である。つまり人間の脳の構造⇕機能と社会⇕二十一世紀の社会の構造⇕機能と社会は相同であるというのが私の考えである。

ここでもう一度「序論」を思い出していただきたい。そこで私は人間について、「人間らしさ(人間の本质)の根源的諸要素(細胞)」の私自身の発見を明らかにした。

(図13) 二十一世紀の社会システム図



さてそこで、私はこの発見に続いて、これらの人間らしさ(人間の本质)の根源的諸要素(細胞)を一つのものの中に蔵している物はないだろうか、と探してみたのであった。

そしてそれが人間の「脳」に外ならないことが分かった。その人間の脳については医学や生理学といった自然科学によって説明が続けられている。

次に私は自然科学の枠を超えてみた。そしてこれらの要素が

全部「コミュニティ」にも含まれていることに気付いた。このコミュニティについては、社会科学のうち特に社会学が、早くからその理論と実証の研究を進めて来ている。

以上二つの事柄から明らかになるように、人間の脳とコミュニティは、同じ人間の本質の要素(部分)と機能の全部(全体)が含まれているのである。

言うまでもなくコミュニティは人間の脳がつくったものである。だから人間の脳とコミュニティは、同じところから発生し、そして同じ体制を持っていることになる。このように両者は「相司システム」を持っていると言うことができるであろう。

これを分かり易くいえば、人間の身体の内と外に「二つの脳」があると言えるのであり、また「二つのコミュニティ」があるともいえるのである。

さて、人間の脳は、構成単位としてのニューロン (neurone) が、互いに相互作用を行い、その実態は、極端な複雑さ (complex systems) を持っている。それは全体として一つのまとまりを持っているが、そのまとまった全体は、各要素(単位)の総和以上のものである。

こうした状態の中で、各要素(単位)の相互作用が起因となって自己組織化が行われている。

こうした現象を呈しながら、人間の脳は常に動いているのである。恒常的な動きは、脳の最大特徴の一つである。人間はこの常時動いている脳があるからこそ動き、そして生きていくこ

とが出来ているのである。

その場合、この脳や人間の動きに差異や多様性が出てくるのは、それぞれの初期条件(初期状態、initial condition)に原因がある場合が多い。これが延いては人間の行動(行為)のパターンとかタイプあるいは地域による様式の差などというものが出てくる結果にもなる。

最後に、人間の脳内のカオスと自己組織化の結果として、人間の脳が、さまざまの予測不能の現象を「創発 (emerge)」せしめていることに留意しなければならない。「言語」がその良い例である。

一般に人間のつくるコミュニティ、さらにそれを推し進めることが出来るならば、人間の社会の構造と機能およびその動き方は、原理的にこれと同じものだといえよう。

ここで社会の単位から考えて見ることにすれば、それは先ず個人(人間)と集団である。その「集団」には、家族、村落、都市、地域および国民社会とさまざまのものがある。これらの諸単位は、複雑な相互関係を結んでいる。そして常に動いている。二十一世紀に入ってから以来、人間社会の動きはますます顕著になって来ているのではなからうか。しかもその動きは、休む間も無く、恒常的に動いているのである。

こうした実態のなかで、おのずから自己組織化の動きが出て来るのである。

ここで繰り返す言うことになるが、二十一世紀の社会は、多価

値、多文化、多民族、多社会（複合社会、混住化社会）といった性格と要因を持った社会で成り立っている。それら諸性格、諸要因は、複雑な相互作用を行って動いている。そしてそれらを含みながら、それを越えたところに「全体社会」が成立している。

二十一世紀における全体社会は、国民社会（国家の範囲）を超えて、「世界社会」という性格を持って来るだろう。そしてその性格は次第に強まっていくものと思われる。

この全体社会としての世界社会は、個々の国家、国民社会を超えて一つにまとまっていく傾向を示してくると思うが、こうした中でも、それら個々の集団と全体社会は、絶え間無く動いているのである。

その恒常的な動きのなかから、自己組織化が行われるであろうことは間違いないところである。

そこから、さまざまな予測不能の現象が、創発されて来よう。それは人間個人のレベルにおける「言語」のようなものだが、社会的レベルではどのような「社会システム」のものになるであろうか。

歴史研究者の出発点は、まさにそこにある。歴史研究者は、それを鋭くキャッチしなければならぬ。

こうなると、歴史家は、まさに天才的なロマンティストである必要があることになろう。

未来に何が起こるか。将来どういう社会現象、歴史的現象が発生するか。それを歴史研究者は掴まねばならないのである。

むしろ歴史家だけでなく、政治家や社会の指導者達も同じことであろう。

こうして未来に起こる創発現象の発生するであろう時点が「歴史のスタート地点」となる。

歴史研究者は、その時点（地点）から遡っていかねばならない。そして再び未来の時点（地点）に向かって、資料（史料）の収集と解読を進めていくことになる。一刻々々、一日々々、あるいは一年々々、眼前に発生する資料を収集していくということになるであろう。そうすることが、二十一世紀の歴史研究者の業務となろう。

#### 結論

歴史は未来からスタートする。これが二十一世紀をリードする複雑系の理論の立場から見た歴史観である。

過去にばかり捕らわれないようにしよう。未来からの光りが、古い資料の意味をすっかり変えてしまうかも知れないではないか。

現在にばかり執着しないようにしよう。未来からの光りによって、その意味、色合いが完全に変わってしまうかも知れないではないか。未来に発生する、予測不能の創発現象を鋭くキャッチする能力を磨こう。天才で無ければ持てない能力のようにも思えるが、それが歴史研究者に取って、最も意義有る研究を成し遂げる方法であろう。

#### 註

- (1) 伊藤正男「脳の働き」東京大学公開講座『脳と心』東京大学

出版会、一九八三年。

Ilya Prigogine and Isabelle Stengers, *Order Out of Chaos, with Nature*, 1984. (I・スタンジェール著『混沌からの秩序』みすず書房、一九八七年)

本間二郎『人間の脳 その未知なるもの』朝倉書店、一九八九年。

James Glick, *Chaos-Making a New Science*, 1987. (ジエイムス・グリック著、大貫昌子訳『カオス―新しい科学をつくる』新潮社、一九九一年)

J.C.Ecclcs, *Evolution of the Brain: Creation of the Self*, 1989.

(伊藤正男訳『ジョン・C・エックルス著 脳の進化』一九九〇年。)

Edger Morim, *Introduction A La Pensee Complexe*, 1990 (エドガール・モラン著、古田章男、中村典子訳『複雑性とはなにか』国文社、一九九三年)

伊藤正男編『脳と思考』紀伊国屋書店、一九九一年)

M.Mitchell Waldrop, *Complexity, the emerging science at the edge of order and chaos*, 1992 (M・ニッチェル・ワードロップ著、中三彦、遠山俊正訳『複雑系』新潮社、一九九六年)

Roger Lewin, *Complexity*, 1992 (ロジャーリュウイン著、福田素子訳『複雑の科学 コンプレキシティへの招待』徳間書店、一九九二年)

Joh L. Casti, *Complexification: Explaining a Paradoxical World Thruogh the Science of Surprise*, 1994 (ジョン・L・キャステイ著、

佐々木光利訳『複雑性とパラドックス』白楊社、一九九六年。

二宮哲雄「複雑系としての人間の脳とコミュニティ―愛知県三好町における事実と政策―」愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』第十二号、一九九七年。

NINOMIYA Tetsuo, "THE HUMAN BEING・THE BRAIN・THE COMMUNITY—Opening up a NEW Science of Sociology in the 21<sup>st</sup> Century—" "Paper Presented to the XV World Congress of Sociology, International Sociological Association, ISA, 2002, Brisbane AUSTRALIA

NINOMIYA Tetsuo, "DESIGN OF THE CYBERNETIC MACHINE OF THE BRAIN・COMMUNITY' system -for the Consultation, Research and Remedy and Reform of the Human Brain and the Community -", Paper Presented to XI<sup>th</sup> World Congress for Rural Sociology Association, IRSA, 2004, Trondheim, NORWAY

(2) 二宮哲雄「脳システムとコミュニティ・システムの対応について―卵と鶏の関係か―」『愛知学院大学人間文化研究所報』第十八号、一九九二年。

二宮哲雄編著『東海地域の社会と文化―ブレイン・コミュニティ―』御茶の水書房、二〇〇二年。

なお『朝日新聞』(安田桂子氏)二〇〇七年二月二六日号と『大分大学広報誌BUNDAI OITA』(佐藤誠治氏) 2007' Summerにも紹介と解説が載せられている。



- (3) 二宮哲雄・中藤康俊・橋本和幸編著『混住化社会とコミュニティ』御茶の水書房、一九八五年。

〈付記〉

本稿は、二〇〇九年九月二十六日に開催された挾間史談会例会において、一会員によってなされた「歴史のスタート時点」についての発言に触発されて、私見として「歴史学上の仮設」を提起したものである。例会では「歴史のスタートは過去に在る」という意見が強かった。

また本稿は、本誌の「巻頭言」との内容的な関連と補遺をも考慮して書かれたものである。